

子どもの絵に見る人と動物の関係の認識 —乗馬体験をした定型発達児, 自閉症児, 知的障害児の比較—

野中香緒里*, 柿沼美紀

日本獣医生命科学大学獣医学部比較発達心理学教室

What horses mean to children: a comparison of drawings by typically developing, autistic and mentally retarded children after a horseback riding session

NONAKA Kaori* and KAKINUMA Miki

緒言

心理学者のボリス・M・レビンソンの研究以降、子どもに動物がもたらす影響は大きいという考えが一般に浸透し、大人は子どもにペットを与えたり、介在活動などで子どもに動物と接する機会を与えている(内閣府大臣官房政府広報室, 2003)。しかし、子どもが自己と動物との関係をどれだけ認識しているかを示す根拠は多くはない。それは、言葉の発達が十分でない子どもの認識について把握する方法が限られているためである。Samuel (2009) は動物との関係についての認識を明らかにするために子どもが描いた絵を分析し、犬とのふれあい体験の前後における認識変化について検討している。

日本獣医生命科学大学では動物介在活動の一環として乗馬会がおこなわれている。財団法人ハーモニセンターの指導の下、本学動物介在活動の会の部員や、学生および近隣のボランティアが一丸となって開催してきた。本研究では、Samuel (2009) と同様の手続きを用いて、乗馬を体験する前と後に子どもに馬と自分の絵を描いてもらい分析した。定型発達児, 自閉症児, 知的障害児の3グループの子どもたちの絵を比較することで、それぞれの特徴について検討した。

乗馬体験という限られた場面の絵を数多く集めることで、ある程度一般化された共通点を見出すことが可能であると考えられる。イヌやネコ、ウサギなどの動物との出会いは日常的なため、子どもがどの場面を絵にしたのかを明らかにするのは難しいが、乗馬は多くの子どもにとって非日常的であり、その場面や状況が特定しやすいというメリットがある。

方法

対象は乗馬会に参加した4歳から18歳までの定型発達児, 自閉症児, 知的障害児の48名である。定型発達児をコントロール群とした。参加者に乗馬会案内に研究への協力依頼文を同封し事前に自宅で「馬と自分」というテーマで描いてきてもらい、乗馬後は会場内のお絵かきコーナーで当日描いてもらった。ウマが描かれていた148枚を対象に、それぞれの絵について乗馬体験が具体的に表わされているかを検討した。

結果

分析の結果、定型発達児は4歳から乗馬体験を絵に表現することができていた。自閉症児, 知的障害児も生活年齢より遅れるもののウマとの経験を絵に表現することが可能であった。表現内容には、ウマの名前、ウマとの関係、ウマをとりまく人の役割が含まれていた。自閉症児, 知的障害児とも絵の完成度は異なるものの、表現している内容は定型発達児と共通していた。特に自閉症児は人との関係のとり方が異質と指摘されているが、乗馬体験を通してウマの立場を理解し、表現できている子どももいた。これは乗馬体験が、定型発達児が経験する内容と共通した部分があることを示唆している。

考察

知的障害児の変化では、描画能力の発達が生活年齢よりは遅れているものの、年齢の上昇とともに絵が具体化していることから、知的障害児の描画能力は障害や逸脱があるというよりも発達の遅れを示すことが示唆される。特異的な描画スタイルを持つと言われる自

*: 発表者

閉症児の中には、4年間ほとんどスタイルの変わらない絵を描く子どももいたが、多くはウマの名前を描き、その特徴を捉えていた。

今後の課題として、絵だけでなく面接、行動観察、保護者への聞き取りなど他の入手可能なデータも併せて評価する必要があると考える。また、今回の研究では、参加者に負担のかからないように配慮して絵を集めたため、障害の種類・程度にばらつきがあった。今

後は、より統制された条件で検討を重ねる必要がある。

謝 辞

本研究の実施に際し、ご協力いただきました乗馬会参加者の子どもたち、保護者の皆様、財団法人ハーモニーセンターの方々にお礼申し上げます。